

Hirosaki
MOCA
Letter

vol.06

TAKE FREE

弘前 れんが倉庫 通信

弘前れんが倉庫美術館を
もっと楽しむフリーペーパー

Ato Memorial Dog

特集：2022-23 H-MOCA 展覧会レビュー

「ずっと待っていたよ」 そんな声が聞こえるかもしれない。

行き交った人々の痕跡が、夕闇に消えることなく、目もと口もとのあたりをまだ彷徨っている。

夜へと沈む街のように世界は不確かで、言葉ひとつで壊れてしまうものだと知っているから、
ときどきわたしたちは、静かに向き合い確かめる。

どこかでだれかを照らしている、ささやかな灯りの存在を。

照らされた微笑みのうちにある、光の届かない部分のことを。

2022年度 秋冬プログラム
「もしもし、奈良さんの
展覧会はできませんか？」
奈良美智展弘前 2002-2006
ドキュメント展
2022.9.17-2023.3.21

美術館になる前の煉瓦倉庫で、2000年代に弘前市出身の現代美術家・奈良美智による三度の展覧会が開催された。その軌跡を振り返る本展では、印刷物やグッズなどの資料、準備の様子や展示風景を捉えた写真家の永野雅子と細川葉子による写真を紹介した。そのほか過去に出版された奈良美智の作品も一部展示した。弘前での「奈良美智展」というひとつの事例から、地域のアートや美術館、そしてそこに携わる人々について考えをめぐらせるための場の創出を目指した。



永野雅子による写真



細川葉子による写真

ナラヒロが美術館になった時

大澤苑美 八戸市美術館 学芸員

当時、日本のアートシーンは青森を見ずして語れない雰囲気があり、開館したばかりの青森県立美術館や、青森市の空間実験室と合わせて、東京から「YOSHITOMO NARA + graf A to Z」を見に行った。この頃は、越後妻有での「大地の芸術祭」や、各地商店街などでのアートプロジェクトなど、地域に出たアートが、美大生や若者世代をはじめとしたアートボランティアにより運営されることが熱を帯びていた頃でもある。その中でも、3回のナラヒロ^{*1}は、民間実行委員会による運営であることや、何百人というボランティアが関わったこと、これを契機にアートNPOが組織された事象などが傑出し、特に「大事件」と注目されていた。

展覧会「もしもし、奈良さんの展覧会はできませんか？」は、その「世界が注目するアーティスト、奈良美智とgrafが、ボランティア、有志と共にぶちあげる、前代未聞のプロジェクト^{*2}」を集大成とする三度の展覧会の成り立ちと有り様を、同じ場所でありながら、収蔵・保存という役割を持つ「美術館」になった旧吉井酒造煉瓦倉庫の会場で、あらためて詳らかにするものだ。展示は、関係者インタビューや当時のチラシ、看板、日記、スナップ写真、新聞記事、ノートメモ、図面など、たっぴりとアーカイブ資料が溢れる部屋から始まる。県内各地のアートの動きや、酒造倉庫の成り立ちの記述まで範囲も広く、「あ、これは、あの時の」と当時を思い出しながら見た来場者も多かったのではないだろうか。展覧会では副次的に扱われることも多いプロセス資料が心臓部として置かれるが、これらも、当事者性と愛着が深く刻まれたからこそ残っていたのだらうと思うと、たくさん



の資料の集積も感慨深い。

一過性・流動的で、どこまでが誰の何なのか曖昧なことに良さが現れるアートプロジェクトを、展覧会としてフレーミングし、歴史に位置付け、保存・継承の対象とする。乖離しがちな美術館とアートプロジェクトが、時を経て、有

機的關係に結実したのを見られたようで、弘前れんが倉庫美術館の位置付けや意味付けをも再確認できる機会となったと言える。

開館後の展覧会は全て拝見してきたが、この企画こそが、よそゆきではない「自分たちの開館記念展」になったのではないだろうか。「あの

ようなことがまたできたら」と再燃したであろう想いが、美術館となったこの場所を起点として、再びこの地のアートシーンを耕していく、これからの弘前の前向きな創造のエンジンになっていくことを期待したい。

*1 当時、弘前での奈良美智展は、ボランティアの間で通称「ナラヒロ」と呼ばれていた（編集部注）
*2 地域創造 vol.20 2006 「SCOPE アーティストとボランティアの手で煉瓦倉庫内に40の小屋を建てた」より

PICK UP!

たくさんのイベントも開催!

会期中はトーク、音楽ライブ、ワークショップなど多様なイベントを開催しました。弘前エクステンジ#05「ナラヒロ」では、高校生の時に奈良美智展のボランティアを経験し、現在はアーティストとして活動する佐々木怜央の作品展示をはじめ、奈良美智展が街や個人に与えた影響や変化などについてリサーチし、表現する「小さな起こりリサーチプロジェクト」や「もしもし演劇部」など、複数のプロジェクトが展開されました。



G.Yoko ライブ「Yokoの恩返し」
(2022年10月1日)



もしもし演劇部 成果発表会「A to A」
(2022年12月18日)



当時の看視スタッフのための椅子

「YOSHITOMO NARA + graf A to Z」資料

2022年度 春夏プログラム
池田亮司展
2022.4.16-8.28

アーティスト/作曲家の池田亮司による、新作を含む近年の活動を紹介する展覧会。2000年以降、データを主題とする表現を模索し続ける池田は、テクノロジーを駆使し、光や音を用いて鑑賞者の感覚を揺さぶる没入型の作品を数多く発表してきた。普段は不可視であるがゆえに意識されない膨大なデータの世界へと鑑賞者を引き込む、視覚と聴覚で体感する作品を展示した。国内初展示となる《data-verse 3》をはじめ、各展示室の映像や音響が時に結びつき、煉瓦倉庫の建築と共鳴した。

2022年度は、2つの展覧会を開催しました。

青森県内の学芸員によるレビューとともに展覧会を振り返ります。

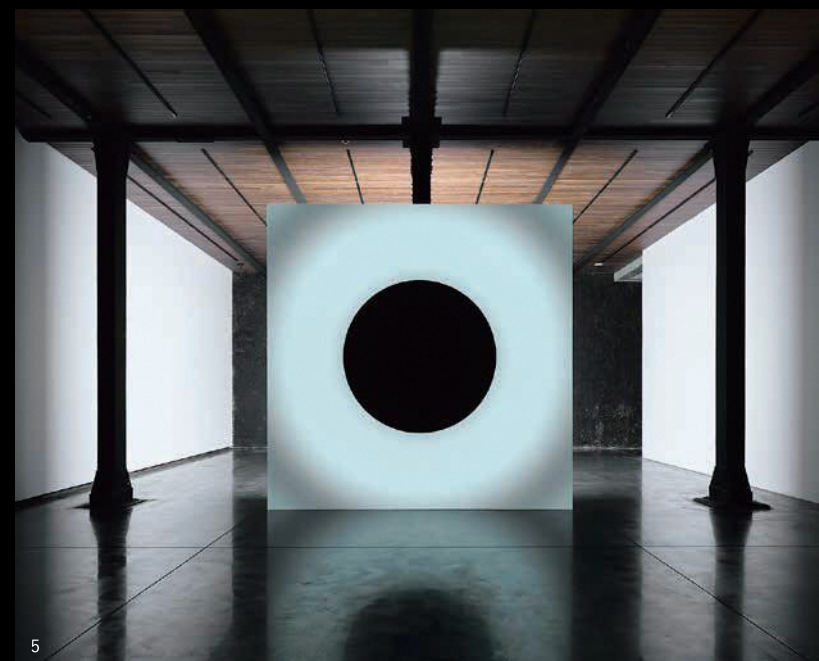
作品を媒介するノイズ

見留さやか 十和田市現代美術館 学芸員

私が池田亮司の作品を初めて見たのは、東京都現代美術館での展覧会「+/-[the infinite between 0 and 1]」(2009年4月2日-6月21日)だった。真っ黒な空間に0から9の数字の白い光が壁一面を埋め尽くしていく《data.tron [3 SXGA+ version]》や、真っ白な空間に大型の黒いスピーカーからノイズが流れる《matrix [5ch version]》など、作品と展示空間のコントラストが印象的だった。それから10年以上経ち、2022年の4月16日-8月28日まで開催された弘前れんが倉庫美術館「池田亮司」展では、作品と展示空間の関係性が全く異なっていた。黒いコールタールの重厚な壁の展示空間に、作品の光や音が混ざり合い溶け合っていくように、一体化していた。この展覧会のメインとなる作品《data-verse 3》は吹き抜けの大きな空間で展示されてい

た。《data-verse 3》は、さまざまな惑星の写真や映像、座標を表す文字、細かい粒子などが目まぐるしいスピードと光で映し出されている。そして映像が切り替わるタイミングなどで高い周波数の音が流れる。音の作品を用いる際に、音の反響を抑えるためにカーペットなどで吸音する事がある。だが、《data-verse 3》は音を遮る壁もなく、コンクリートの床のまま展示され、音も光も展示空間を超えて、他の作品と混ざり合い、反響していく。1つ単体の作品として見るのではなく、ほかの作品と混ざり合いあかかも大型のインスタレーションのようで、まるで池田の作品の為に作られた展示空間のようだった。池田は美術作品だけではなく、音楽も作曲している。池田は、リズムやメロディーだけでなく、秩序がなく、統合されていない音、ノイズ

(騒音)も用いている。一般的には「音楽」からノイズを想像する人は少ないだろう。しかし、機械化や工業化が進むにつれて、私たちはありとあらゆるノイズに囲まれている。ノイズは私たちにとって最も身近な音でもある。《data-verse 3》では、耳障りな機械音のような高音のノイズが流れるが、音から連想できる情報が削ぎ落とされ、何らかの映像を関連づけることはできない。それゆえに、その音は同じ空間にあるレーザーを用いた映像や平面作品とも繋がり、さまざまな作品を媒介していく。池田の強いインパクトのある映像や音が空間から遊離せず馴染んで感じられるのは、元酒造工場の無骨な強さを内包する弘前れんが倉庫美術館そのものが作品と拮抗するからであろう。



1 《data-verse 3》2020年
2 奥：《data-verse 3》2020年 手前：《data.tecture [n°1]》2018年
3 右から左：《exp #1》《exp #2》《exp #3》《exp #4》2020-2022年
4 《data.flux [n°1]》2020年
5 《point of no return》2018年

©Ryoji Ikeda

PICK UP!
PEOPLE

美術館とまちをつなぐ
わたし・アート・まち



「TRAIN-TRAIN」は 音楽活動の原点であり原動力

KEEP THE BEAT 高取 宏樹さん

THE BLUE HEARTS『TRAIN-TRAIN』のLPレコードは、私にとって特別なものです。ジャケットデザインや、歌詞本の絵本のような雰囲気が好きだから、ということもありますが、何より、シングル曲「TRAIN-TRAIN」が、自分の音楽活動の原点でもあるからです。

「♪栄光に向かって走る あの列車に乗って行こう……」。北海道士別市で暮らしていた10歳の頃、ラジオから流れる「TRAIN-TRAIN」に、イントロから衝撃を受けました。感情をさらけ出す歌詞に憧れてバンドをやりたいと思うようになり、高校時代に念願のバンド活動を開始。そして弘前大学に進学し、バンド「S.P.N POWER」を結成しました。

結成から今年で26年目になります。バンド活動の傍らライブハウス「Mag-Net」に勤務し、店長も務めました。2020年3月惜しまれつつ閉店。しかし弘前から音楽発信の火を消してはならないという思いから、クラウドファンディングも経て同年秋にライブ



ハウス「KEEP THE BEAT」をプレオープンさせました。コロナ禍
だけけれど、あがいてでも、やっ
てやろう! という精神は、
「TRAIN-TRAIN」の歌詞に共
鳴していると思います。(談)

【KEEP THE BEAT】

プレオープンを経て2022年4月
にグランドオープンしたライブハ
ウス。ライブステージとして、録
音スタジオ、貸しスタジオとして
も利用できます。

弘前市土手町112-1 1F
TEL 0172-26-6968



聞き手・文：佐藤史隆(タウン誌編集者) 撮影：成田写真事務所

Exhibition information 展覧会情報

2023年度 春夏プログラム

大巻伸嗣—地平線のゆくえ

会期：2023年4月15日(土)～10月9日(月・祝)

弘前れんが倉庫美術館

[開館時間] 9:00～17:00 ※但し、金曜日・土曜日に限りスタジオ、ライブラリーのみ21:00まで開館

[休館日] 火曜日(祝日の場合は翌日に振替)、年末年始

〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1 [TEL] 0172-32-8950 [Mail] info@hirosaki-moca.jp

[駐車場] 思いやり駐車場2台 ※お車で越すの際は近隣の有料駐車場をご利用ください

[表紙写真] 作品：奈良美智《A to Z Memorial Dog》2006年 撮影(2018年)：畠山直哉 ※改修前の煉瓦倉庫

[編集協力] ものの芽舎 [デザイン] デザイン工房エスパス [印刷] 凸版メディア株式会社

[編集・発行] 弘前れんが倉庫美術館(指定管理者 運営業務担当 エヌ・アンド・イー株式会社) [発行日] 2023年2月28日

STAFF
VOICE

美術館のおしごとアレコレ
スタッフに聞きました!



弘前れんが倉庫美術館 Members #06

運営チーム 須藤 順子

須藤順子さんは青森市に生まれ、東京の短大で英語を学び、さらに大学の国際学部へ編入学。卒業後は食品会社で営業職、帰郷してからは観光施設のコンシェルジュや新幹線のアテンダントを務めた後、アイルランドへ渡り、カフェに勤務。弘前れんが倉庫美術館には開館時の2020年春から勤めています。

須藤さんの仕事は、主に団体のお客さまの対応です。旅行会社等からの申し込みを受け、スケジュールを調整し、当日の対応も行います。

団体のお客さまが美術館に到着した時最初に耳にする、美術館の建築や歴史的背景などの解説も須藤さんの役目。「それぞれに興味、関心事が異なりますが、求められていることをその場でキャッチし、解説できるように心がけています」とのこと。ここには須藤さんの様々な経験が生かされています。

うれしかったのは、「須藤さんにまた案内をお願いしたい」とお客さまが再訪してくださったこと。こういったことが須藤さんのモチベーションにつながっています。

聞き手・文：佐藤史隆(タウン誌編集者) 撮影：成田写真事務所

Event report イベント報告

ボランティア交流会

実施日：2022年11月12日



八戸市美術館のボランティア「アートファーマー」が来館し、当館のボランティア「れんが倉庫部」との交流会を開催しました。部員が八戸の皆さんに館内を案内した後、それぞれの活動について意見交換。活動する上での工夫、心がけていることや活動への思いについて話しました。

Join us /

ボランティア「れんが倉庫部」

10代から70代まで幅広い年代の方が所属し、広報やイベントのサポート、館内コンシェルジュなど様々な活動に取り組んでいます。

詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。



▲ 詳細はこちら

HIROSAKI
MUSEUM OF CONTEMPORARY
ART